

東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 34



入院棟15階からの眺望。安田講堂が真中にあり、西の遠くに池袋のサンシャインビルが見える。
(平成13年 5月)

CONTENTS

- ◆新病院長ご挨拶…………… (加藤) ……2
- ◆退官のご挨拶
21世紀の Center of Excellence ^…………… (前川) ……3
- ◆東大分院閉院式典挨拶…………… (齋藤) ……4
- ◆祝賀会……………6
- ◆〈薬剤部〉伊賀立二教授に聞く…………… (加我) ……6
- ◆東大キャンパスの“花鳥風月”…………… 8
- ◆出来ごと …………… 8
- ◆行事予定 …………… 8

新 病 院 長 ご 挨拶



病院長 加藤進昌

4月から武谷前病院長のあとをうけて病院長に就任いたしました。3年前に精神神経科科長のご挨拶を申し上げてから日も浅く、まだまだ東大病院の事情に疎いままで不安いっぱい船出ではありますが、精一杯つとめたいと考えています。

私が担当する2年間の課題を考えますと、まず分院との統合と新病棟のオープンがあります。100年の歴史を有する分院との統合は、それぞれに培った土壌の融合というそれ自体が大事業であると同時に、昨今の組織のスリム化、経済効率の追求といった国家的な要請の流れの上にもうひとつの問題があることは明らかであります。国民の健康を担う病院が単に経営効率だけで計られるべきでないことは言うまでもありませんが、他の国公立病院とまったく乖離した状況にもし東大病院があるとすれば、その存立もいずれ問われることになりかねません。診療と同時に教育と研究面でも、わが国を代表する機関であり続けるために、なにが必要か、その資源はなぜ必要かを国民に向かって説明することが求められているのだらうと思います。そのためにも患者さんへのサービス向上に努め、診療・教育・研究の機能分化をはかっていく必要があると考えています。

新病棟は入院患者さんのアメニティー向上に大いに寄与すると期待されます。住宅事情がもはや戦後を脱した現在、病気になって入院する場所が自宅よりも貧困であるという状況はばかっています。しかし、ここでも投資した税金の意味をどう説明するか

が求められています。おそらく、より高度かつ先端的な医療の提供と同時に、在院日数の短縮と稼働率の向上という課題が待ち構えているものと考えています。医療事故をおこさないために必要とされるチーム医療の構築とともに、医療側の意識向上にもいっそうの努力が必要だらうと思います。

国立大学全体の問題として独立行政法人化がいよいよやってきます。この中で附属病院がどうあるべきかが問われると予想されます。病院は東大全体の中でも圧倒的に大きな予算をとっており、また研究面でもかなりの競争的研究費を獲得しているにも関わらず、東大本部の中でのそのプレゼンスは小さなものにすぎません。先に述べた機能分化、大学院と診療科の関係などからんで、病院の主張はこれからどんどんしていかなばと考えています。しかし、それには一種の「自己責任」が伴いましょう。役割分担の中で診療に直結する部分では少なくとも無駄を廃し、収支均衡する構図を全学に示さなければなりません。

こうしてみますと、どこから手をつけたら良いのかと思うばかりです。しかし、逆に考えれば、本院・分院統合、病院新築、法人化が重なってくる今は機構改革にとって千載一遇のチャンスでもあると考えますし、わが病院にはそれをのりこえる人的資源はあると信じています。皆様のご協力を得て、東大病院の明日のために邁進したいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

退官のご挨拶

21世紀の Center of Excellence へ



救急部長
集中治療部長 前川 一彦

まず、過去10年間、お世話になった東大病院の皆さん、ボランティアのみなさんにお礼を申し上げます。病院内でも最もリスクの高い救急医療、集中治療の現場で大過なく過ごせましたのも、身体を張ってベッドサイドで頑張ってくれた医局員、研修医、そして彼等を支えてくれた看護婦（士）さん、放射線技師の方々、臨床検査技士のみなさんなど、偏に多くの方々のお蔭です。東大を去るに当たって、救急部長、集中治療部長の任を解かれるに当たっての感慨は、ともかく一件の係争事件にも巻き込まれることなく大過なく過ごせた安堵感でした。唯一の心残りは、本院と分院の統合、新病棟のオープニングに直接関与できないことです。今から10年前、東大病院に着任早々、病院将来計画委員会病院部会長を仰せつかり、東京大学医学部附属病院マスタープランを眺めながら、本院と分院の統合に向けての取り組み開始し、また新病棟の青写真を描き始めたのが昨日のように思い出されます。あの時の発泡スチロールの病棟モデルが今秋には実物の病棟として稼動を始めることを考えますと感無量です。この10年間

に人も変わり、院内のいろいろなシステムも改善され、外来棟も新しくなり、明らかに東大病院は大きく変貌しました。しかし少し辛口の採点ですが、東大病院が漸く病院機能としては世間並みとなったといえるのかも知れません。

東大病院はこれからが勝負時といえます。新たな世紀に東大病院に期待されるものは何でしょうか。それは、日本、世界を相手に医療における The Center of Excellence を目指すことです。それには先ず、世界のトップレベルの臨床水準を確保し、これらの情報をネットワークを通して世界に発信します。システムとしては、例えば日本中否、世界中から患者さんを受け入れるために365日、24時間、英語で対応し東大病院が有する医療資源、機能の全てを説明できるコーディネーターを備えます。必要ならいつでも日本中、世界中のどこからでも固定翼機、ヘリコプターを使って患者さんを収容できる体制を構築します。提供する医療はClinical path を利用しナースコーディネーターが医師と共に（あるいは補って）、患者さんの全ての疑問に答え、支援します。また病院食も菜食主義や回教徒の患者さんに対しては、それぞれの患者さんの意に添ったものを提供する必要があります。こうした医療を提供できる体制は一朝一夕にはできませんし、東大病院で働く全ての職員の大きな意識改革も必要です。夢のように思われるかも知れませんが、10年前、夢のように思っていた本院と分院との統合、新病棟の建築も実現したではありませんか。在野に下って、次の10年間の東大病院にはこんな夢を託したいと思います。皆さんのご奮闘をお祈りして、再度、感謝の気持ちを表したいと思います。

患者さんの“声” (ニコニコ文庫)

ハマりました。みごとにハマった一ヶ月でした。耳の手術で入院という“主婦猶予期間”を与えられて、まず走ったのは市立図書館。

全てのしがらみを断ち切って与えられる自分だけの時間。テニスとはもとより、習い始めたバイオリンも、Eメールすらできない。うーんと有り余る時間を吉にするか凶となすかは自分次第。——決めた！家人には言えぬ密かで大いなる目的——本に埋まる！

というわけで日頃読めない長編や話題作を手当たり次第にリクエストしたものの172人待ちなる本ばかり。諦めて夫のカードも使って適当な12冊の本と一緒に入院した。

翌日院内図書館の開館日。実は事前偵察で養護学級の隣に「ここに文庫」が在ることは確認済み。しかし場所と名前の印象から子供向けばかりだろうなと期待してなかった。覆されましたね、いい方に。なんとあのリクエスト172番目の『永遠の仔』や上野

千鶴子関連本が微笑んでるんですよ。テレビ放映されたいですけれど、被虐待児の心理描写に迎合がなくまじめで、私は面白かった。読書子にはやや古いけど高村薫の『マークスの山』。彼女の頭は良すぎてストーリーにのめり込むまでに時間がかかる。でもハマった快感から『リビエラ……』も読む。もうけ！は「とにかく時を忘れさせるものを」との無理な注文にニコニコと図書ボランティアの方が紹介してくれた『マートフ』。イラン人の夫に囚われた米人妻子の、イランからの闇ルート脱出ルポは、文化の違い、社会通念。男女意識が“教育”で再生産される怖さを感じたことでした。教育の力って大きいですね。

効きすぎる暖房と、足りない照度と、眼精疲労と消灯時間との闘いの日々。そのエネルギーが、窓に時間を使えた青春時代にカムバックさせてくれ、私なりにまた熟くなってます。

(本当にありがとうございました。図書館)

(阿部紀子)

東大分院閉院式典挨拶

平成13年3月22日 於：山上会館大会議室



分院長 藤田 敏郎

本日は年度末のお忙しい時期にも関わりもせず、村田医学教育課長をはじめ文部科学省の方々、また地域を代表して煙山文京区長、そして蓮見総長をはじめとする東京大学の関係の方々の御臨席を仰ぎ、東京大学医学部附属病院分院の閉院式を挙げていただくことは東大分院教職員一同にとりまして誠に光栄に存じ、また感謝に絶えません。

明治30年に端を発する東京大学医学部附属病院分院の歴史は、百有余年の永きに及びます。分院は、20世紀という激動の世紀のすべてを公共の医療施設として歩んできたこととなります。この間、日露戦争、関東大震災、第二次世界大戦、更に戦後の混乱期を逞しく生きのび、着実に組織を充実させ、診療・教育・研究の場として発展を遂げ、今日に至りましたが、104年目にその使命を終えることになりました。

それでは少し分院の歴史を紐解いてみたいと思います。今から104年前の明治30年7月に分院の前身であります内務省医術開業試験所（通称永楽病院）が麹町区永楽町に設立されております。その後、明治36年には文部省に移管され、明治41年に現在地に移転しました。最初、内科・外科・歯科の3科で官費の診療を開始したのであります。大正6年に東京帝国大学に移管され、医科大学附属医院分院となりました。その間、文部省医師試験場、薬剤師試験場としての役目は従来通り続けておりましたが、歯科試験場は大正5年に神田一ツ橋に移転し、歯科療院と称されまして、現在の医科歯科大学の前身となったのであります。また大正12年には現在の癌研の前身であります財団法人癌研究所附属腫瘍治療所が設立されました。この治療所は昭和8年に豊島区の癌研究会への移転まで続けておかれていました。分院の歴史の中で、その後の医療に大きく貢献したこれら2つの施設が分



東大分院閉院式
ご来賓の先生方と式次第



東京大学総長 蓮見重彦先生ご挨拶

院内で産声をあげたことは大変喜ばしいことであります。

昭和14年には東京帝国大学臨時附属専門部が、また昭和20年には第二厚生女学部が設置され、これらは27～8年頃まで続いております。昭和28年には、医学部に衛生看護学科（通称衛看）が開設され、新しい時代の要請に基づいて、より高いステータスの看護婦の育成を目指したものであります。この衛看はまさに時代を先取りした学科であったと言えます。昭和40年には保健学科に拡充改組を機に、本郷キャンパスに移転しております。この間に卒業された多くの方々が現在看護学の領域の指導的立場で活躍されていることは、皆様方よくご存知の通りであります。

開設以来、診療科は着々と増設され、昭和32年には総合病院の名称の使用が認められております。昭

和47年には分院に心療内科が設置され、51年にはアイソトープ研究施設と放射線治療棟ができ、益々総合病院としての幅広い活動が行われるようになりました。この間に多くの医師が育ってまいり、これらの方々には地域医療に献身的な努力をする一方で、新しい医学・医療の開発のために情熱を傾けてまいりました。その結果、多くの輝かしい業績が生まれました。例えば、胃カメラの開発をはじめとする世界に先駆けた仕事がいくつか生まれました。

このように、日本のみならず、世界の医学・医療をリードしてまいったのであります。そうした活動を通じ、数々の優れた人材が育成され、東京大学をはじめ全国の大学医学部・医科大学の教授・助教授を多数輩出してきました。また、教育病院の病院長や医長など指導的立場になられた方も多く、わが国の大学や病院の医学・医療の発展と促進に大いに貢献してきたと自負しております。このような輝かしい業績を残すことができたのは、もちろん先人の努力によるものでありますが、文部科学省や大学関係、文京区そして何よりも地域住民の温かい御支援があったからであります。ここに改めて御礼申し上げる次第であります。

さて、分院は現在13診療科、7中央診療部、教職員数367人からなり、病床数245床、一日外来患者数639人の中型の病院であります。建物の大部分は今では珍しくなりました赤レンガの落ち着いた3階建て、廊下は温かみのある木でできております。都心とは思われない閑静な住宅地にごさいます、木々に囲まれ、春には桜が大変美しく、秋には紅葉と四季折々の風情がありまして、患者さんの心をなぐさめてくれております。また、小回りがきく病院組織を最大限に生かし、『家庭的で患者さんに親切な病院』という評判をこの間一貫して得てまいりました。親子3代4代に渡って受診されている御家族も多く、地域住民からのこの病院によせる信頼感は極めて強いものがあり、今更ながら百年の歴史の重みを感じさせます。

歴史的には明治41年にいわゆる官費診療（当時、施療と申しまして医療費を払えない人達のために無料で病気の治療をする施設）をもってはじまってお

り、昔から患者さん中心の医療を実践してきた病院であります。この精神は、現在に至るまで受け継がれており、患者さんが安心して気持ちよくかかれる病院にしようと職員一人一人が心がけてまいりました。更に、近年、大学病院での医療がとかく専門化のために、ともすれば病人を見ずして病気を診るといことになりがちであります。私共は病める人を診、そして癒すことを日常心がけてまいりました。更に、各科の連携を緊密にして、全人的包括医療を目指してきたのであります。

分院で働く教職員の多くは、このような良い病院を何らかの形で医療施設として残して欲しいと考えていましたが、政府の行財政改革の流れに沿って、また東京大学医学部でも将来計画の一貫として、附属病院に統合されるという形で終焉を迎えることになったのであります。

分院はなくなりますが、内科（旧第四内科）、心療内科は既に再編されております内科部門の腎臓・内分泌内科、心療内科として活動を始めており、外科（旧第三外科）は上部消化管外科を担当することになりました。その他の10診療科と中央診療部もそれぞれの診療科・部の一員として附属病院において活動することになりました。

本年10月本郷地区に開院予定の新病棟においては、本院と分院の教職員が一緒になって高度の専門的医療を実践することになっております。分院が明治41年現在地にて官費診療を開始して以来、脈々と受け継がれてきた患者中心の医療という信条が新病棟においても受け継がれ、そして基礎研究の成果に立脚した高度の専門的医療とヒューマニズムに根ざした全人的包括医療の両輪が駆動することによって、21世紀の東大病院が真の Center of Excellence として飛躍することを願ってやみません。

永年にわたり、分院を御支援下さいました多くの方々から心から御礼申し上げますと同時に、今後ともどうか分院時代と変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、本日ご臨席賜りました皆様方に深く御礼申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

祝賀会

於：御殿下記念館 ジムナジウム



祝賀会場入口



尾形悦郎 前分院長ご挨拶



式次第



〈薬剤部〉伊賀立二教授に聞く



薬剤部 伊賀立二

病院薬剤師の活躍が目を見ます。
現在の活動と新病棟での計画について伺いました。

Q：現在、薬剤師は何名いますか？

A：37名です。7月からは12名が加わり、47名になります。

Q：薬剤師の新病棟での業務の計画は？

A：新病棟では薬剤師の業務・役割をより一層明確にし、充実させる予定であります。

1. 薬剤管理指導業務：

現在、すべての病棟に2名の担当薬剤師が配置されており、薬剤の適正使用および管理を行っています。特に10病棟は薬剤の適正管理を始めとして患者さんへの服薬説明、医師、看護婦への医薬品情報の提供などを行っています。これらの業務を行った場合には、診療報酬として薬剤管理指導料（1回350点、月4回まで）が算定でき、病院収入に貢献しております（平均700件/月、平成12年度）。新病棟におきましては、さらに展開していく予定です。より一層のご協力をお願いいたします。

2. 注射薬の混合：

現在、IVH用輸液につきましては、薬剤部で混合して各病棟に

供給しています。IVH用輸液以外の注射薬は、患者さん毎にセットして各病棟へ供給しています。注射薬の混合は、人的・時間的な問題から現在、無菌病棟（北8）にのみ、薬剤師が出向き調製しています。新病棟においてもIVH用輸液の調製は、薬剤部で調製した場合には無菌製剤処理加算として1日40点/袋が算定されることから、現在と同様のシステムで行う予定です。その他の注射薬の混合については、無菌病棟と同様に担当薬剤師が朝・夕に病棟へ出向き、各病棟に設置されたクリーンベンチ内で行う予定です。当初は数病棟から開始し、暫時、対象病棟を増やしていき、なるべく早い時期に全病棟に展開したいと考えています。

3. 抗がん剤の注射薬の調製

新病棟においては、抗がん剤の注射薬の混合調製も計画しています。現在、実現に向けて運用面での検討を行っています。

Q：服薬指導は具体的にどのようにしているのですか？

A：患者さんが薬物療法の意義を理解して、ご自分が服用している薬剤を適正に使用するために必要な情報を、その病棟を担当している薬剤師が分かりやすく説明しています。このために、

【その他】 8月11日および12日の新病棟への移転の準備をすすめており、大型什器の搬入が完了した。他のシステムも6月末の整備完了を目指して準備している。



IVH・注射薬調整室 (約80m²)
地下1階に位置し、IVH・注射薬の調整用のクリーンベンチが4台設置されている



注射調剤室 (200m²)
地下1階に位置し、自動注射薬調剤システム (ユヤマ製) が設置されている



お薬相談コーナー

院内、院外を問わず、より詳細な服薬指導が必要な患者への能動的服薬指導とともに受動的なお薬相談を行っている。午前10時30分から午後2時30分までの4時間を調剤部門以外からの薬剤師も加わって専任体制で対応している。

薬の写真が入った「お薬説明シート」や「イラスト入りのお薬説明カード」などを作成して活用しています。現在のところ、入院患者さんの約半数が対象になっています。薬剤師2~4名が1チームとなり担当していますが、全員が現業との兼任であり、多くは時間内の業務が終了した18時以降に病棟に出向いているのが現状です。

Q：手術室の麻酔医のところに薬剤がセットになって届いていますが、その目的は何ですか？

A：麻酔カートといい、使用予定の薬剤を患者さん毎にセットして供給しています。このように、薬剤師が使用予定の薬剤をリストと照合しながら患者さん毎にセットし、別の薬剤師が再度チェックすることにより、医療事故防止に努めるだけでなく、薬剤の管理も同時に行っています。

Q：分院との統合で心配されることは何ですか？

A：本院と分院ではシステム面がかなり異なっていますので、早くこちらの方法に慣れていただき、新病棟での新たな薬剤業務の展開へ一緒に頑張っていこうと思っています。このためには、新病棟での業務開始に間に合うように研修を行う予定ですが、期日がないので効率よくできるか心配しております。

Q：外来患者さんにはどのようなサービスをしていますか？

A：一つには適正な院外処方せん発行のために院内薬剤師による処方鑑査が挙げられます。医療機関は適正な処方せんを発行する責務があります。このためには、薬剤部の薬剤師による処方鑑査が不可欠であり、毎日約2000枚の外来処方せんの鑑査を行っています。特に抗がん剤や相互作用などに注意しなければならぬ薬剤などに関しましては、前回処方歴および他の診療科から飲み合わせが悪い薬剤が処方されていないかなどをチェックしたり、場合によっては臨床検査値、TDM値のチェックや病名などとの照合も行っています。そして、処方上に疑義があった場合には、必ず処方医に確認しています。このように院外処方せんについても、院内処方せんと同様のチェックをすることにより、入力ミスなどによる医療事故防止に貢献しています。もう一つは、患者さんが服用あるいは使用している薬剤に関する情報を提供していることです。こちらの方も、全ての外来患者さんを対象に行っています。患者さんが処方された薬剤を適正かつ安心して使用していただくために必要な情報として、医薬品名、服用方法、使用上の注意、患者さん自身が重篤な副作用を早期に発見するための初期症状、相互作用の回避方法などを「お薬説明カード」などを用いて、分かりやすく説明しています。さらに、相互作用や重複服用などを回避するために、「お薬手帳」を活用した患者さん自身による薬歴の一元管理を啓発

しています。

Q：現在、治験はどの様になっていますか？

A：臨床試験部で受付・管理し、外来の薬剤部において調剤を行い、お薬カウンターあるいはお薬相談室で服薬指導をしています。

Q：先端医療にはどの様に関与していますか？

A：人工臓器・移植外科で行われている生体肝移植手術時の免疫抑制剤と抗菌剤の血中薬物濃度を測定し、適正に投与されるよう外科医にフィードバックしています。このため、担当者は休日・夜間にも対応しています。

Q：TDM情報の冊子はいつ頃から発行されていますか？

A：TDMはTherapeutic Drug Monitoring (治療薬物モニタリング)の略です。近年、多くの薬物の血中濃度がこれらの作用発現と密接に関係していることが明らかになり、血中(生体試料中)の薬物濃度を測定することによって薬物治療を適正に行うことが必要となっています。本冊子はTDMを適正な処方設計に役立てていただくことを目的に刊行されました。1991年から始まり、すでに56冊発行されています。

Q：最近、薬剤部で製剤して話題となっている治療薬があると聞きしたのですが？

A：最近、時々マスコミにも取り上げられているのですが、薬剤部と形成外科の共同研究により開発した軟膏で、炎症後の色素沈着や老人性色素斑などに対して、ヒドロキニンを含む軟膏とトレチノインを含む軟膏の併用療法が劇的に効果をもたらすことがわかり話題にあがっています。現在まで1200症例以上に使用されています。

Q：薬学部とはどのような関係にありますか？

A：協力講座として薬学系の大学院生の教育をしています。今年度は13名の大学院生が在籍しています。また、薬学部学生の病院実習も担当しています。

Q：医学科学生の臨床実習に「臨床薬剤学」が1週間加わりましたが、学生の反応は如何ですか？

A：実習の目的は「医薬品の適正使用の必要性を理解し、その具体的実践について修得して、将来のリスクマネジメントに生かす」ことです。教育用のテキストを作り、演習と実習を通じて病院薬剤師の業務を見学させています。この春に卒業した学生から始まりました。医学科の学生は真面目で熱心に取り組んでいます。実習の感想文を読むと、実習の前は薬剤部の実体がほとんどわからなかったのが、実習をして初めて大学病院の中枢的役割を担っていることを理解してくれたことがわかります。臨床実習に加えていただいた成果が出ています。

(インタビュー 加我君孝)

東大キャンパスの“花鳥風月”

ハクモクレン(モクレン科)

風はまだ冬のなごりの冷たさをはらんでいても、“光の春”を実感する日があります。ちょうどその頃、薄暮の中にほのかに浮かびあがるハクモクレンは、やさしいフォルムの街灯のような佇まいです。

ふっくらとした純白の花は気品があり、しかも妖艶な印象もあるためか、多くの人々に愛されています。しかし、散ってしまった花びらが、たちまち茶色に変色して無残な姿をさらすのは白い花の宿命でしょうか。

ところで、この花は「方向指標植物」であり、開花直前の蕾はすべて北を向いているといわれます。陽光を受けた蕾の南側が先に膨らみ出し、その反動で先端が北を向いて、しまうからなのだそうです。

来年の春、外来玄関西側のハクモクレンを見上げて、蕾の方向を確認してみませんか？

看護部 阿部 篤子



行事予定

(平成13年5月から9月まで)

平成13年

- 5月14日(月)～ 平成13年度国公立大学病院臨床検査技術者研修(文科省)
18日(金)
- 14日(月) 東大病院にここボランティア講習会
- 16日(水)～ 研修医オリエンテーション
18日(金) (臨床講堂)
- 21日(月)～ 平成13年度国公立大学病院薬剤部
25日(金) 職員研修(研修講堂)
- 28日(月)～ 平成13年度国公立大学病院診療放射線技術者研修(文科省)(研修講堂)
6月 1日(金)
- 6月 4日(月)～ 平成12年度会計実地検査・東大
8日(金)
- 22日(金) 東大分院診療業務休止
- 7月 6日(金) セタコンサート・外来ロビー
- 17日(火) 第2回東大病院にここボランティア講習会
- 9月20日(木)～ 入院棟竣工記念式

出来ごと

(平成13年3月から4月まで)

平成13年

- 3月 1日(木) 看護学校卒業式
- 3月 8日(木) 助産婦学校卒業式
- 3月13日(火) 院内消防訓練
- 3月22日(木) 分院閉院式懇親会(山上会館、御殿下体育館)
- 4月 1日(日) 臨床試験部が中央診療施設として承認される。
- 4月 3日(火) 新規採用等職員オリエンテーション(研修講堂)
- 4月 6日(金) 助産婦学校入学式
- 4月17日(火)～ 平成13年度国立大学附属病院リスクマネージャー研修(研修講堂)
26日(木)
- 4月26日(水) 記者会見「HIV感染者への臓器移植」に関する術後経過について

発行 平成13年5月21日
 発行人 加藤進昌
 発行所 東京大学医学部附属病院
 〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL 3815-5411
 「東大病院だより」編集委員会
 編集委員長 加我君孝
 事務担当 総務課
 印刷所 株式会社学術社